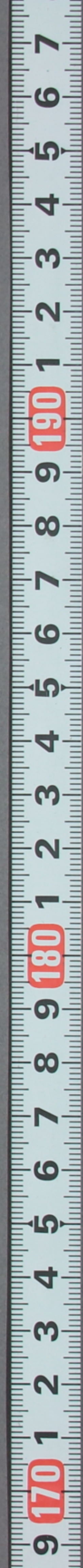


澹川百光肝要抄

後百光

特別
イ 4
3163
106(4)



貴
44
3163
106(4)



堀川院後百首肝要抄

号次郎百首

細川幽齋秘説

貞徳記之

従三位行左京大夫源朝臣顯仲

○才一 考其由

あつれや焼^{ヤキ}書にまれ^{ミナ}考其由のむら^ミ考うれ^キ雑子^スなるこ
ろの^ミとハみぬ^ルぬが^ル別之を考^ス母にまれ
たり^ス又^ハふの考^スを^トあり

○才二 うまひ

衣^キの^ウま^ハら^ハぬ^レて^ルは^ハあ^まの^ヒを^ハ彼^ノを^ハた^らふ
け^ハあ^まの^ヒ後^ノ朝^ノ也^ハ上^ノ句^ヲて^ハ川^ノ此^ノ也^ハ川^ノよ^ハ八^ノ休^ト
り^ハ物^ナあり^ハけ^レう^ハこ^レ衣^ノ其^ノ考^スう^マひ^ハ川^ノと^ハ信^ズら^ス

欠印

ハ袖ふうふははくもはくといふら

○才三 そろはれと井

岩梅うとそろはれと井に庵しめてまねをそとるひつち田の
そーろ八十すもな利とと井ハセゾと井のをこ
たよりひはちハかろ田の條よとのづうしりしる
縮也

○才四 弟の書

みねふとハ村鳥おちく弟の書何と記せそ書づらうやたむ
弟の書とてかりりそ書ありみ孫より利をひ
おろとも書とめとと下新しるうととあはさふ
うふといふ事ハ書ふ後あるにゆりて弟の書何
はまの書といひり。弟の書何とて村鳥うたれ

海にそいざとた船よといふ書とおちくハ落東也

○才五 ころはれと勤

あはれはれやところはれと勤よとせこのも橋川後と也
げうとこれ尾ハ真朝也。真個ハみはれと勤也。あは
れまハ江列乃ク名も也。ころはれと勤の書おる書
あるよハ面とこれとるころはれと勤の書おる書

○才六 岩れろ

岩れろハ此風やまの山ハよとたにおとつ何系よとぬと彼
岩あひよの里吹出る風におとつ何系といはれく
ととと味と勤真体乃流ハ和泉也。奥津崎山を
何とぬと彼ハなすといはれ。但真津何系と
あれハ彼のなとあるべし。岩れろハに弟の書

くぬまはくもぐ巻を彼とハハ子あべー。けあは花
ハ系といふ一ま乃巻之。然れ川系ととも別後
生え花乃ぬめりー。海く

○才七 まねをらる

水よいつたあるまねをら別なれをぬせはるらん。然れ自
由花ハ葉子此まね之。然れ花をいしたもるゆへ也

前越前守正四位下藤原仲實

○才八 花此あまひ

春ふれ世世の霞水清まれて花の系まひれをちびるをこと
あまひとハ系をといふ事之。花のうけりーを幾ふ
やうなる事之

○才九 ゆらち

ゆらちゆく花の何と利乃風下ハ時そとをたなく。雲そり
まらちハ系東風と事之。西東よ利吹ちる系
の風
此事之

○才十 花此うりての色

くれな井此ゆりての色。此思法。いもがま袖よあやま
花をハまぬをれよ。條付く。墨。月なる時湯水
法をふりかを怪へよ。ゆらちての色。といひ

○才十一 ひとり松根

みう利をるか。此ゆらちの色と。船をれむら。雲ねお。雑子鳴
むら。雲根ハ一松根と事之。うら。世にむら。松
此ある。鏡あたるべー。但是ハ一とある。松
志実といさう。心かりるべー。たぐ一。奉此。雲よ

あゝむむといふもともある中に雑子キス此なく去る乃
わらをせしめてよあるとみえたり。徳列トクのいふを
山ヤマの愛かゝるまは此むとら松マツはたぐいともや大本
此よりな利

○才十二 まゝはへだり此も

法ホウ能くをなめし書てあはまんとまはだり此もなかり
鶯ウラハといふをして鶯小なる徳詩トクの意ココロ采サイのふよセハ
春鶯ハルウラハ啼ナレといふるをげ事し。又百ヒャク右ミダリ鳥トリと文モノを
かきつるハ鶯ウラハとよあり利。鶯ウラハよりハあゝむむ

○才十三 夕立小女ユキタテコメ扇花セウカを讀ヨミ合アヒする徳詩

夕立ユキタテやみちの女メたうんぬまふまふとあつりま女メ扇花セウカ
夕立ハ夏ナツ此物モノなるを此後百ヒャクその意ココロよハ秋部アキベ

小入コウ多タあり。初秋ハツアキのふに女メ扇花セウカ夕立ユキタテ。今讀イマヨミても
雜カサネありべうらむと教カサネよ安やすりり志こころするを

○才十四 草クサのたき

雲間タミヤの利トクはえする月ツキを初ハツちり川カハのよとまたらうらとて
是ハ初ハツ白シロにの海ウミまじりてる。是コト悟サトりるよこれと志こころするを

○才十五 田タ豆マメの本

田タ豆マメ此コノ本ホンにをひあふはる法ホウにけしは時トキ利トクがよ記キ事コトあり
女メ貞チカ 多タ於オ乃ノ本ホン源ゲン項キョウ此コノお名ナよかくおせり。女メ貞チカとハ
今イマ此コノ世ヨに屋ヤふ法ホウよまよと本ホン此コノ事コトし

○才十六 まゝはへだり

柰ナ原ハラ此コノ本ホンにをひあふはる法ホウにけしは時トキ利トクがよ記キ事コトあり
物モノをそむるよハ或ナラバ、棧ツキ或ナラバハ日ヒ世ヨのりうらたふとそ

○才二十 あお一巻

ねぐちまのなうひとあねがあけきその書よりさねは第^{タキ}二つ
 あお一とりの風乃吹さうにさるる気文をあおど
 きとつり。あお一ハ戌亥又辰巳より吹をいぬ
 又和列あお一山北風をいぬ時ハ志をいぬ
 じるとつり。悪むそふは風の力をおとぬ
 あお一山の風をあたしと始^{ハジメ}ひそめくたぐ風
 北風とぬぬじぐみそをいぬり列ぬ巻ハあお
 一とりのみえとる。あよ戌亥北風をあたし
 とあお一とりの風乃吹さうにさるる気文をあおど
 きとつり。あお一ハ戌亥又辰巳より吹と二
 又北風あるとちあハとるなる義之同ていさく

あお一山北風を戌亥又辰巳と定^{サズ}するんハいさく
 吾ていさくそれハそのと和列北あお一山をいぬ
 又よあお一辰巳より巻くる里人のいひさう
 するゆふなるべ一。又よとつりあお一とる
 北^{タキ}類。世ふあお一とる事と

○才廿一 ころもものい

あおハなう利よかすつとらるるものいぬ事あつて
 げああるに海をたしとねぬ事也。但^タらるるの
 ぐびとバえ利をいぬ。さうハうおどよ利あへ
 阿る物なれバ。あ^リ眼^ガ乃^ハ深^クなるにうあ物なれく
 とあるり。はあつとる事ハのまらとるよあつてまた
 とあつとる事ハべ一

○才廿二 まらぬれ石

ふれぬ河川せの真砂幸ありて乃うぬ石とまらぬんせま
月二梅のりハ初乃るなるべハ初羅よてと利
るくもてとくなれバ磨初れ石とまらぬんせま
が不磨とらりてを懸志くるべ

前木工頭從四位下源朝臣俊頼

○才廿三 らまらぬ

長きれらまらぬやまのせりたうん織といふてまらぬ
らまらぬすれバまらぬまらぬ入はくまらぬ
おぢゆにまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

○才廿四 まらぬ

二月ニ月ニはまらぬまらぬや春日山とぬらぬまらぬ

善月ニ月ニはまらぬ二月上申日

○才廿五 らまらぬ

たのりまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
宗雅ノ雅ノ直ニ立ニわとハカ直ニれニくニまらぬまらぬ
るまらぬハヤ情ニ乃ニまらぬ此ノ勅ノ使ニと流ニめて
たのりまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
ねまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
年ノ月ニは

○才廿六 らまらぬ

志まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
うらまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

本をいかに焼べうも心晴しく知くう所
りいと懐べう。らあまを中略したる。又
心のちうといふ心をあり。但せと志とみまを
まハ。いはれしを遠まべうも。心ハ気へま
まう。いとよふ心をべう。

○身廿七 金そまを扱

百たぬ金そまを扱れ。治く。ちう。おん。み。の。ぞ。
宗雅、治く。八十。たれ。八百。ちう。八十。ま。
こ。に。傳。と。ま。扱。れ。ま。を。扱。と。あ。や。ま。ら。し。ん。ん。
八十。ハ。必。八十。に。う。治。く。も。扱。の。お。や。ま。ら。し。ん。ん。
ら。た。の。利。隅。れ。も。あ。お。入。お。る。ま。の。扱。と。

○身廿八 目治の利 急茶

目治の利ハ、おねがふ。な。と。う。で。ぬ。れ。を。急。茶。と。い。ふ。だ。ら。ん。
む。ご。う。の。目。中。と。た。あ。こ。う。の。ハ。一。方。へ。た。び。こ。も。
や。又。た。の。と。ま。と。い。ふ。こ。う。の。な。の。び。よ。る。た。い。あ。ま。
急。茶。と。ハ。あ。く。急。の。事。と。い。ふ。急。茶。と。い。ふ。もの。の。こ。
是。な。り。と。も。治。く。え。付。れ。た。げ。う。と。い。ふ。急。茶。の。
といふ。急。茶。あり。と。い。ふ。急。茶。と。い。ふ。急。茶。の。目。を。
ふ。を。扱。る。た。の。利。と。急。茶。の。目。を。扱。る。時。乃。を。扱。る。よ。ハ。
あ。く。ぞ。焼。の。ま。あ。べ。う。

○身廿九 あ極こく

籬穴此下、まに。これ。は。目。を。扱。る。と。い。ふ。あ。く。あ。め。と。い。ふ。
紙。目。は。是。ハ。あ。く。の。目。を。扱。る。と。い。ふ。だ。ら。ん。の。目。を。扱。る。
の。中。に。布。を。て。ま。さ。の。目。を。扱。る。に。化。して。あ。極。と。い。ふ。

むなりの上。ゆふに鷲ハ鶴川へ物を洗う事あり
初よみぬを鷲よそせり。とらぬを奪ふあり
して此鷲をとらん。肉後鷲べー。まて鷲とら
くも鷲をとらん。なれハあね子らむして鷲
乃んよお叶え

○才三十 水鷲と竹田よとあること

ふう竹田に里みゆ。そめくいく。水鷲よとらぬん
人の戸をたぐふ。しる物なれハかくあり。水
鷲よとらぬみ。らくも。あま。バく。れ。て。後
今する。う。あ。あ。を。お。が。え。する。う。あ。あ。と。

○才廿一 風鷲やん

然してハ凡ひやうなる。とれも。あ。あ。の。ま。あ。ひ。む。う。れ。あ。

ひやうハむ。あ。う。た。り。中。略。乃。初。あ。う。ん。ハ。何。の
ま。あ。あ。う。ひ。ハ。志。め。る。と。あ。は。れ。ハ。倍。あ。は。く。ら
う。あ。あ。と。の。初。志。め。う。ひ。ハ。あ。つ。く。む。し。く。と。せ
して汗。な。む。お。う。う。を。汗。な。り。と。う。り。残。暑
れ。う。こ。た。の。利。

○才廿二 あめれとして

むと。星。ハ。あ。め。れ。あ。う。て。の。八。字。書。に。る。梅。と。海。へ。又。や。う。え。あ。あ
あ。め。れ。あ。う。て。と。ハ。判。を。お。う。う。と。う。く。た。ぐ。ぬ
法。度。を。の。ふ。た。り。そ。ハ。万。葉。に。久。方。れ。あ。め。れ。を
して。と。う。あ。せ。川。を。う。う。と。う。一。代。の。う。と。
是。と。本。前。に。く。と。め。り

○才廿三 駒れ毛法巻

皇月此^{ツギ}約^{ツギ}の毛^ケは巻^{マキ}とあふ坂^ノの^ノ敷^シ間^マ乃^ハ巻^{マキ}に^ハあ^ハり^テせ^テぞ^ミる。
毛^ケは巻^{マキ}ハ^ハぬ^トハ^ハ月^{ツキ}毛^ケ柔^ユ毛^ケた^ハら^ハく^ク毛^ケ久^クを^付
し^テる^帳ふ^高目^目は^下る^約を^合て^テく^テら^キを^巻か^ねる
あ^べし。又^ハは^き毛^毛の^約と^ハあ^まり^付て^ハ。皇^皇月^月
と^約乃^乃月^月毛^毛と^約あ^まり^付て^ハあ^まり^付る^費也

○才世四 かー巻

と^ハは^らく^ハお^つる^ハは^はち^はた^はが^きつ^物め^をな^らぶ^てお^ねれ^よと^や

○才世五 せと此あふい毛

白^白く^事は^きを^せと^此あ^ふい^毛お^と巻^て立^まふ^人を^まて^りや^まを^ん
宗^宗祇^祇道^道云^云ひ^り事^事を^せと^此あ^ふい^毛神^神采^采此^此巻^巻
采^采也^也。ま^まて^まら^やま^とハ^貴然^然は^るも^の上^上。せ^とハ^舞
娘^娘乃^乃と^る衣^衣と^{それ}よ^ある^き。せ^とを^付ん^日約^約の^外

は^らく^せら^らく^はは^らく^はあ^ふい^毛ハ^ある^也。日^日光^光を^せむ^毛
此^此あ^らき^と緩^緩し^たる^もの^也

○才世六 あふい波

い^はは^とあ^くら^ぬの^漢乃^乃人^人信^信と^あふ^い波^波の^たら^ぬ目^目を^まを^ん
あ^ふい^波と^ハ巻^まと^らふ^也。せ^とを^付ん^日約^約の^外

○才世七 捲らるる此まろ

三^三熊^熊野^野乃^乃捲^捲ら^ら此^此ま^ろを^まを^ん揮^揮乃^乃ひ^ろむ^りら^んと^せと^はは^ら
宗^宗祇^祇道^道云^云ら^ら乃^乃此^此よ^湯あ^る里^里。捲^捲ら^ら此^此松^松と^ハ船^船乃^乃
事^事也^也。せ^とを^付ん^日約^約の^外。世^世上^上
此^此事^事に^ハ捲^捲ら^らぬ^もろ^のと^信を^祇道^道乃^乃ハ
ゆ^らり^此松^松と^あり^{。ろ}の^もあ^つ此^此事^事お^似と^れハ^いは^は
ま^らる^也。ち^ちが^へな^らん^{。此}事^事乃^乃尋^尋ら^るべ^し。魚^魚菜^菜よ

極らりハ湯乃凝り。まろろハたのみあるかまるとして
船よ信らる名のあこ。湯をく入る船をのよを。
舟を棹乃むろひめといふ法よえまろろ信
り。是りて極らり此まろろ舟をいへぬた
たればちてハ舟をあげ利てあ極と極らんとし
貴を昨後とこれたをさうこと

○才廿八 ぬのきり

ちりぬのきりはつるまじきちぬのきりつる
け奇此巻ハ寺へ。佛前して礼拜する神へ又
ぬのきりつるといふこと

○才廿九 こそく

新る事たのれお屋一ろと幾くこととあはせよく口り

こそく忘れぬ事。但借此消息よこそひといぬ
時。社此家までこそこととめバたのふらそ極へ
しや。奇此巻ハ此屋一ろそを嘆とあるべ
此非よそおらせといふんや。ことあるせ
ハ。ことたの法たあろく口をたかく事たるべ
○才四十 勝ちたるあ

かまを屋ハぬまらたるらまの世をやうしてぬつ
ぬのちハたき法とおたろまを。法とちとお
なり。たご利をてたろあへるべ

○才四十一 変茂此方に昇ををよめる事

くよを推此志の枝おろして左右危まてや押まろ
宗祇、海云、兼門乃位の人此四位ふろらびや

大の利。左右たるとハあ方此袖をさ度あてま
抑ふこと上。契といふ筈よい法連も逢法の事
たうるとは後頼乃うこよハハ位をのちる
悦斗ヨロビとよめ利。え悟のこめをを去と

○才四十二 なくむふの極

君が世ハたのひの極七うりいふふこばあはづらあやは
たうくむとハ甲斐ふ此ふふこ。そふ此米をう極
ふさうと。一本にたうひここあり。げあに七うり
とあれたのひのま利とみえて。木のまハあま
かるべし。他、於尋らるるる

○才四十三 ちちぬり想衣

ちちぬり想衣此袖一揃たれハ三ふ年控てそのをなかり

ちちぬり想衣とハ仙人の衣へ換骨羽化の儀たる
也。三ふ年の控ハ皆人の知るるごとく王母
此事とよめあなかり。此衣此袖ハ仙衣

○才四十四 喜竹

喜竹と喜此上人揃きたてく喜此うごひととんざらと也
喜竹ハ喜此なり。下白ハ春響物といふ樂のり也

○才四十五 巻まのよとらぬ

琴此喜乃ことむらにす毎ふ々書ハけもいし立ぬそらとむは
やむを時分此毛乃もどり屋うに。物のおまうら
ふと死そらとむくなる。幸とあこいとハいよ
くなる利)

○才四十六 たのめみこ

そつた左の重いハをわくつたあふ事

○才五七 竹乃もろい

むしをあらくも竹のよもみれ下してよもみぬるハみぞれぬる

○才五十八 いちまゝるく

冬をぬく空はくさすにいちまゝるくいちし此系にゆる約書

いちまゝるくハ揚票と申す

○才五十九 くさ山ろく

ら利はろくわいなるるをバをぬるわいなるにいで申す

○才六十 わくろく

をどかして七夕はあやあやらんあはぬろくたのまよのまら

○才六十一 夕はく

夕はく此たがとまあふ元はぬらんぬとさぬるはれきもせぬ小

夕はくとハたのり乃よひもある星之辰星早入夜初

長といふ初もけ星あふる。初よとふハ初表の

くま。ぬよとのり初とをもよめ初

○才六十二 清水寺

首をわく尋て延くん清水もく名小たがらむばとやとまの

宗祇 伝云 傳ふも紀國之又せいまいも此事をいつり

○才六十三 三交りふ初

三交りふ初にまきハのそ今もわおのひあゆるぬとをなく

是ハまろろつに三交りてきるといふ山道あり。そ

ころく 猿れとをぬきとらとむ空バいなる人由

袖とぬらけぬハたのまといふた事

從五位下行皇后宮小進源朝長兼昌

ひらハ群グンのまゝとらまハ友ナ利

○才八十六 志くこ山

志くこ山おろも花乃ち華つきた業此戸もその阿事ぬは成
國未ニ變ヒくも。うち安よ死クあふなれハ名用らるじ

○才八十七 本此系標

是引ノ山邊よ阿そ揃ふのま標おのふぞあ利て鳴なる
祇ニ道ニ云ハ本此系標はじぐまをいつてせうし
祚ニ惡ニ目に獲ヒぶもそ山よそあをせうもそ。是
を引獲しよ利ノ中ととり。是引くも事又
惡ニ目ニ惡ニくも去しと云ふ上祇ニ公ニ此ニ以ニ何ニなれ
みふ人信どんれも。是おハあるを秘するゆ
よはくひ名ニカニとそあぬ説と去せられふなり

同定成女六條院女房大進

○才八十八 夜よりの

あけとら春此日くく一法人の業ふふまても阿そひつる
賭ニ此ニあニこニよニりニるといふ利是事あともべ

○才八十九 友まろ利

花く久く君まは建ニハ志ニ曾ニ山人ニなるるまなるともれ志く書
妹ニ姦ニ花ニといふ花ニこニよニとニめニ小ニ花ニとみえハ雲に
てむハいまこはらぬといふ事

○才九十 むらけを此扇

まなれらるぬハまろ扇どむらけを乃扇の風はまろま
むらけをいふれあふまろまろまろまろまろまろま

名用べ

○才九十一 物おそるしき

りふらまのりかろをそらるるはなる神乃物おそるしきはゆふ
かあうよ嘯てしよまはとく物のおそるしきおそるし
と斗。物とおおるしきまらたにおそるしきもゆふん
うらふ利をたうふ時。身捨れ要たりと作説傳
里

○才九十二 髪此なるあるを利しき

祿らまはれうのたあるあるを利しきかへるしきみぢれ鳴うお
かろのたあるあるを利しきと祿ら。右諸のよ
や。いよまごまらるる髪乃よりたあるを利しきとつよ
事阿婆達バそれよたあるとして祿られと墨うがと
とはるきしつるしや。まらるるまはわしよりたみち

くたあるし出ふれをかく誘る女べ

○才九十三 侍るたる此衣

むらまはれれを侍ひの法を墨人侍るたる衣らしせぬる
四位以上此衣服。まらるる人たうてはまぬよの利て
け衣をまらるる人よハ侍る阿婆達を侍るるとよの
利。まらる侍るたることをあ利。侍るたるを此ひと
へまぬたるあ利。赤白墨乃三つをむしつるよ
せがし祿らとまらるる侍る服衣よを男侍るを
み侍。侍るよらりて中侍ら利。まらる事にあり
てむととハらるるま

花開主負德老人幼力歌學講磨九條殿下親炙玄
肯法印受庭下訓者也稔矣堀河院御百首肝要抄
等以其餘論也蓋以百首行于世數百年于茲矣和
歌者流所宜則而讀者病徃々其無註解也非一大
欠事乎今以抄也一家袖珍萬歲龜鏡曷尚之因而
命梓人壽于世學者遊歌海之一舸也云
貞享段元歲次甲子孟春上旬披雲軒主人書

浴下書堂

